

Title	Studies in income and wealth, Vol.15, National Bureau of Economic Research.
Sub Title	
Author	鈴木, 諒一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.11 (1955. 11) ,p.893(61)- 896(64)
JaLC DOI	10.14991/001.19551101-0061
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551101-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つことを意味する。従つて數カ年以上に亙る同一資料に種々の係數を當嵌めた場合、不平等度の順位は必ずしも一致しない。

厚生經濟學の見地からは經濟的厚生が等差級數的に増大するためには所得は等比級數的に増大する必要がある。再分配が行われたとき不平等係數はその前後の變容を明確に示さなければならぬ。この意味において平均偏差とパレート係數は失格するが他の係數は合格する。

第三章と第四章では既知の不平等係數についての吟味が行われる。先ずローレンツ曲線であるがこれは低額所得者の方から累積度數を求めている。ところが不平等を醸成する主たる要因は高額所得層であるからこの累積法では不平等の様相を明らかに反映できない缺點がある。その上この曲線は連續曲線を假定しているが實際は折線を用いるのでここにも擬制がある。パレート係數は周知の如く不平等の意味について曖昧なところがある。デブラ法則は今日では最も優れたものとされている。所得分布が二項分布になるためには(一)その變動の要因が無數であり、(二)その効果は相互に獨立であり、(三)その個々の効果が全體に比べて極めて小さい、と云う三前提を充す必要がある。デブラはこの第二點を修正して da が所得 w に比例するとの假定を設けてその分布法則に到達したのである。しかし所得の變動が Random shock に依存すると考えることが果して妥當か否かについて問題が残る。

第五章では階層の切り方がとり上げられ、低額層と高額層の分布、最高所得層における勤勞、事業、財産所得の相對比率が示されている。もし財産所得のウェイトが最大であるとすれば高額層内部

二には各人の利益を得る機會が富者にも貧者にも均等に分布している場合を考察し、各人の所得變化は、平均所得の變化と確率變數の和であるとの結論を得る。デブラの分布法則の前提は前述したところであるが、一般に經濟量の變化には次の三つの場合がありうる。

(一)その標準偏差が全く外生的な Random shock を受けて連續的に増大しつある場合、これがデブラの假定である。(二)その標準偏差が全く内生的な經濟諸力によつて決定され、變化は獨立でなく前の時點に依存する場合、(三)その經濟諸力は嚴格でなく一部分は衝擊を受ける餘地のある場合、カレツキーはこれ等の假定の中、第三の場合が最も現實的であるとして標準偏差が變化するとき經濟量が對數正規分布するための條件を求めている。

ネイマンはフリッシュの行つた經濟分析に對し、經驗的經濟分析の態度はコペルニクス以前の天文學者の仕事に似ているとの批評を下している。それは假説そのものを深く問うことなしに現象の記述のみに意を用いている。假設自體の吟味がなくとも見かけ上の現象の説明は可能であり、天文學で云えば地球中心假説でも天體の運行について豫測さえなし得たのである。「資本主義經濟の持つ不確定要素の性質、そしてそれが確率法則に従うとする假説はさらに吟味を要する。確率變數の分布が正常型をなすと云う假定は經濟學者の屢々論難するところであるが、それは統計的假設檢定法が未熟であるからに外ならない。デブラ分布が他の分布に比して卓越しているのも正規型に關する統計學の全知識を利用できるからに外ならない。所得分布の變動様式の探究はまさに統計學の發達と共に前進するはずである。」と云うのが著者の結論である。この外に附録とし

の不平等度は不況時には減少し好況時には増大するであろう。ここで景氣變動との關係においてクズネツツの資料が引用される。失業は低額所得層の人員を増加させるが主として影響を受けるのは不熟練勞働者である。高賃銀所得者は勞働組合組織によりその影響の受け方が比較的少ない。かくして賃銀格差の變化が説明される。第六章では一八九〇年以降の日本の所得分布がとり上げられこれに對するデブラ係數の適合度が檢され水準と分布の關係に及び消費性向との關係が論じられる。第七章ではわが國の企業収益の分布から利潤の集中度を考察し第八章の賃銀分布と對比される。この場合、大正十三年、昭和二年の勞働統計實地調査に基づいてローレンツ曲線による考察が行われ、昭和二、三、四年の分布との比較が行われる。

かくして第九章で階層順位の變化がとり上げられる。低額所得層と高額所得層とが完全に入れ換つた場合の所得分布についての變化が考察される。第十章では分布の決定要因として(一)生來の素質の差異、財産相續による利益の維持、(二)循環變動の効果、(三)財政政策の効果、(四)マルシャクに従つて確率成長の法則を展開する。最も簡単な場合を考へて總人口 N が不變、總所得は一定、出發點たる年度には完全平等の分配が行われていたとする。次の年から毎年人口の半分が無作為に選ばれて一方の半分は1ドルを得、他の半分は1ドルを失うとする。所得水準は不變でも、その値は時の経過と共に増大し十九年後から二十三年後に至る四年間に不平等度は一〇%上昇する。メンダースハウゼンの實測によれば一九二九—三三年の間に變化係數は約一割上昇しているが、マルシャクはこの事實を以上の確率論的説明だけによつても爲し得る點を指摘している。第

て、(一)明治二十一—昭和二十一、及び二十六年度における累年の所得分布資料、(二)明治三十四—昭和二十一年における課税所得の構成比率、(三)昭和五—十六年における累年の營業所得の分布と明治三十七—昭和十一年における累年の營業稅額分布、(四)明治三十一—昭和元年における資本金の業種別構成、(五)デブラ係數の計算例が示されている。以上で解るように本書は豊富な統計資料を縦横に駆使してパレートから現代に至るまでの分布論を體系的にとりまとめつつ批判を加えたもので斯學に志す者にとつての好參考書である。ただその結論がどちらかと云えば統計學的分析にウェイトがおかれていたが今後の方向として經濟學的分析についても一層の精密化を期待したいものである。(鈴木 諒一)

Studies in Income and Wealth, Vol. 15, National Bureau of Economic Research.

國民所得の研究は最近の計量經濟學界における最も注目されている分野であるが、今日では消費及び投資を規制する要因が單に Flow としての所得だけでなく、資本蓄積高や流動資産等の stock 概念が重視される必要が認められ、アダム・スミス以來放置されてきた國富の理論がここに再登場するに至つた。叢書 Income and Wealth, National Bureau of Economic Research はまさにかかる要求に應じて發行されたものであるが、ここではその第十五

卷 (New York, 1953, pp. 230+VIII) を紹介しよう。この書は論文集であり、第一編家族構成の差による所得の比較(フリードマン)、第二編所得の不平等度(ガウイ)、第三編世帯所得の地域的、社会的、人種的、職業的比較(ジョンソン)、第四編所得、消費及び貯蓄の年別比較(フィッシャー)、第五編世帯貯蓄と所得水準及び分布との関係(フライディ)、第六編農家世帯の支出曲線と所得概念(レイド)、第七編都市と農村の等生活水準(オーシャンスキー)、第八編今後の動向(クズネット)となつてゐる。本稿では主として實證的な論文について述べて見よう。

第一編では消費の構造に及ぼす諸要因を挙げ、家計の分類基準を求めようとするのが目的である。ある世帯の總所得を Y 、食物への總支出を T とし AB を常數とすれば、 $Y = A + B \dots (1)$ なる一次關係式が成立すると考へ得るであらう。次に S を家計における成人の數とすれば $T = C + D \dots (2)$ を得る。更にこれに年齢差を考慮すべきであるが、一九二八年の Federal Employees Study において採用された分類によれば、十五歳以上の男子、十五歳以上の女子、十一―十四歳の児童、七十歳、四―六歳、三歳未満の児童となつてゐる。しかしかかる詳細な分類を數式に導入することには多くの複雑性があるので、世帯の成員の數を S_m 、その年齢を Y で表わし $S_m = S_{1m} + S_{2m} + S_{3m} + \dots (3)$ とおく。世帯主自身を成員の中に數えなければ、この式は一次式に書き變えられ、 $S_m = c_0 + c_1 Y \dots (4)$ となる。例えば十二歳の少年と十歳の少女を持つ夫婦の世帯では、 $S = 1 + c_{12} + 12b_{12} + 14a_{12} + c_{10} + 10b_{10} + 10c_{10}$ とおくことができる。フリードマンはイリノイ州の

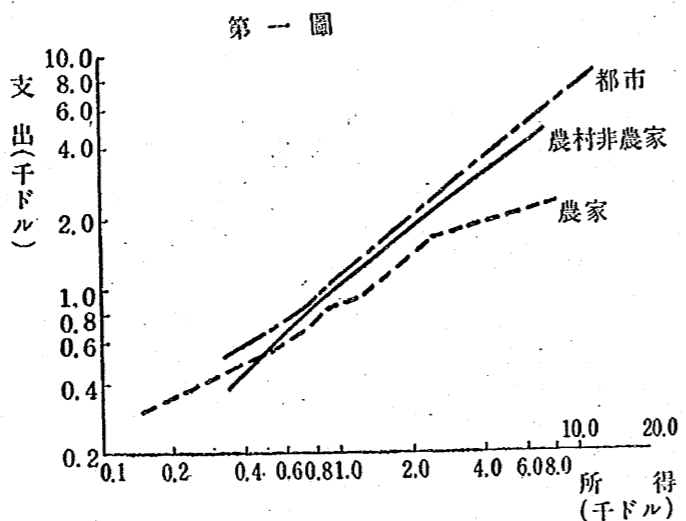
家族	世帯所得 ドル	人員數	理論的 所得 ドル
A	150	1	50
B	100	2	100
C	50	3	150

資料から支出と貨幣所得の關係について、二人、三人、四人及びそれ以上の世帯について夫々 $Y = 1171 + 0.45X$, $Y = 1383 + 0.42X$, $Y = 889 + 0.6084X$, $Y = 1980 + 0.42X$ なる回歸方程式を導き、かかる函數形が成立するかの理論的證明はないし、統計資料も極めて簡單にしか示されていないので、かかる法則が一般的に成立し得るか否かには疑問が残るわけである。

第二編ではローレンツ曲線が出發點となる。ピグウの厚生經濟學を始め、理論上は屢々最少の不平等度が望ましいとの議論が行われる。しかし各人の欲望充足の比較に際して均等分布が成立つためには凡ての所得者は同人數の扶養家族を持つことが必要となる。實際には各世帯の家族構成は異なるから、消費者として均等の欲望を充すための最適分布形態は所得者間の分布が完全に平等となることを意味しない。それ故ローレンツ曲線が均等分布線に一致することはない。理論的所得分布と實際上の所得分布とは上表の如くに對比されるべきである。この差が現れる原因としては(一)才能、環境、財産の差、(二)經濟活動の循環運動、(三)政府の政策、(四)人口の性別年齢別構成、(五)都會化の程度と地理的位置、所得分布を考察する際の單位時間等を擧げることが出来る。

第三編ではこれ等の要因の影響が一層詳細に分析される。先ず一

九二九、一九四〇、一九四五年についてニューイングランドを始め十地区の農業經營者の平均純所得が比較され、次に農業労働者の月別平均賃金について同様の比較が行われる。非農家については一九三五―六年について先の十地区を更に大中小都市群に分けて土着白人の生活保護を受け



ていない世帯の中心數が比較される。この二つが所得の地域別比較であり、その次に都市別地域別の白人と非白人の都市生活者の所得が比較される。この外性別職業別産業別の平均所得が比較されている。この編は専ら實證的記述に終つてゐるが第四編ではやや理論的な分析がなされる。先ず年齢別の

消費單位人口と所得の百分率と兩者の比率が示され(一九四六年度について)年齢別の所得分布からローレンツ曲線が描かれる。その結果を見ると六五歳以上の分布が最も不平等で、以下大體年齢が低くなるに従つて平等化してきてゐるが、最も不平等なのは二五―三四

歳で、二四歳未満の階級の方が反つて不平等である。この不平等を齎らす一因として財産の保有高の不平等がある。フィッシャーはここで年齢階級別の流動資産保有高と消費單位及び非耐久財の保有量を比較し貯蓄の年齢別分布に及んでゐる。第五編フライディの所説はデューセンベリーの相對所得の假説を發展せしめようとしたものでかなり詳細な理論的分析が行われているが、本稿の如き短編の紹介では要旨を盡し難いので省略する。

第六編では農業における所得の概念が問題としてとり上げられ、第一圖の如き純所得と支出の關係が求められる。この圖を見ると消費性向については農家と非農家の間に明らかな差異があるが兩者の貨幣所得に對する支出の弾力性を求めると、夫々 0.92 と 0.9 八で大きな差はない。このような事實が見られる一つの理由は、經濟變動が年間所得を一時的に變化せしめ、しかもその程度は農家における方が強く、地域的にも異なることである。しかも農家所得の計算に際しては多くの不正確な要因が加味される。所得が年々變化するため、農家では所得が消費性向を決定する適當な要因ではなくなつてきてゐる。第一圖を更に分解して地域別に夫婦だけの農家の所得と消費の相關圖を描いて見るとサウスダコタやコロラドにおいては支出が所得によつて受ける影響は僅少で回歸線は水平に近くなるが、南北カロライナでは所得の増加と共に消費の増加する度合も著しい。都市を農村の消費 Y と所得 X の關係を示す回歸線を比較すると、 $Y = 1200$ ドル以下の所得階級を含む農村では $Y = 1171 + 0.45X$ と、 $Y = 889 + 0.6084X$ であるのに對し、 $Y = 1383 + 0.42X$ の所得階級を含む都市では $Y = 0.5 + 0.383X$ なる關係がある。所得が變動し易くな

る程支出曲線は水平になる傾向がある。しかし都市と農村の支出曲線がそれほど差がないのは、中位の所得層をとつて見ただけではその支出構造を明らかにできない事實を物語るのではないか。農家の消費においては自家生産される食料と燃料及び自己所有の家屋の賃貸賃値が重要な役割を占める。この種の所得は消費に對して貨幣所得と異なつた影響を興えたと考えられるし、しかも後者よりは安定的であるから、これ等の項目を切り離して考える方がよいであろう。

問題は農家の消費支出と資本支出との定義にもある。農機具の補填費や修繕費は明らかに資本支出であるが、多くの農家においては資本が一定に維持されることは少ないのでこの評價は難しい。そこで(a)これ等の項目を支出として計算し、資本の變動を調整するに足るだけの期間の支出を以てこれを修正するか、(b)資本支出を全く支出の中に計上しないで消耗した資本の額を支出に計算するかの代用法がとられる。しかし何れの方法でも正確な減價償却の計算法が必要であり、價格が安定しているときでさえ消耗した資本の價格を把握し難いことは周知の事實である。更に(c)現在の操業費用だけを農家支出の中に入れ消耗した資本を無視するか、(d)現在の操業費と補填及び修繕費だけを支出とするか、(e)全資本支出を支出の中に算入するか等の問題がある。ある年度の生産所得の増加の一部はinventoryの増加となるであろう。この様な事態が起る場合にはinventoryの變化を含む純所得を問題にするよりも、この中の純現金所得だけを問題とする方が良さそうに見える。inventoryの變化を考慮しなければならぬとすればその評價が問題となるからである。第三に農業支出と家計支出とはある程度まで結合してい

る。自家消費の食料や燃料がこれである。かくてレイドは純現金所得とこれに對應する支出との關係を考察するのである。年所得五〇〇ドルにおける家計支出の弾力性を見ると、ニュージャーシー〇・三八九、ペンシルヴァニア〇・四四三、ミンガン〇・三八〇等で最高はカロライナの〇・七八一、最低はコロラド・モンタナの〇・一五七である。レイドの論文は相當に長く、ここにその全貌を紹介することはできないが、統計的把握の難易から所得概念の修正をとり上げている面が強く、理論的考察が不十分な感じを受ける。最後のオーシャンスキーの論文はフリッシュの説の所得弾力性を修正しつつ都市農村の同等の生活水準を求めようとするものであるが、もはや豫定の紙數に達したので他の機會に紹介したい。(鈴木 諒一)

ハリス編

『社會科學者シュムペーター』

本書は、アメリカにおける十八人の著名な社會科學者によるシュムペーターについての好意あるしかも冷靜な分析である。その内容は、大きく五部に分かれてゐる。第一部は、序論として編輯者ハリスが筆をとつてゐる。第二部は、「人と學說」と題され、フリッシュ、スミシズ、ハーバラー、サミュエルソン等によつて敘述されている。我々は、この第一部と第二部によつて、シュムペーターの人間性について知ることが出来る。就中スミシズの、家庭的事情

と社會的環境による性格の形成についての敘述と、ハーバラーの、第一次大戦の終りから一九二四年に亙るシュムペーターの政治的經濟的實踐についての分析は、興味あるものがある。

シュムペーターは、一八八三年オーストリーに生れ、十九世紀的文化の爛熟しているウィーンにおいて教育を受けた。ウィーザー、ボエームを師とし、パウエル、ヒルファードイングを友とする彼が、近代經濟學と歴史學派更にはマルキシズムとの華かな論争を體驗したことはいうまでもない。この體驗は、彼に經濟學的方法の探求という使命を終生負わしめた。では、シュムペーターは、この方法論争に對してどんな態度をとつたか。この問いに對する解答は、本書の全般を通じて初めて興えられるものである。しかし我々は、ここでこの問題に對する解決をまとめてみよう。結論を端的にいえば、シュムペーターは、歴史學派からはその歴史性を、近代經濟學からはその論理的精密性を、マルキシズムからはその體系の壯大さを攝取し、彼の所謂シュムペーター體系なるものを作り上げたのである。「すべてを理解することは、すべてを恕すことである」という言葉を以て彼は、その最初の書物(本質)の序文を始めている。方法的寛容は、彼の精神の一大特質である。しかもこの多様性、複雑性にも拘らず、相對主義と冷笑主義に墮することなく、折衷的にではなく、自己の體系に統一的に攝取していつた彼の強烈な知的獨立性を見逃してはならない。神祕的ともいえる彼の統一的構成には、何人も驚かされる。現實には、無限の側面がある。過去において經濟學者の意見を分裂せしめたものは、少からず強調點の相違以外の何物でもなかつた。従つて二者擇一的な接近方法に對する寛容の程

書評及び紹介

度が、事實上支配していたものよりも、大きければ大きいだけ、進歩も過去よりは、より大きくなることをシュムペーターは強調した。問題は、現實に對する分析である。「科學は、認知的な論争點で勝負のつくまで斗つたり、またその後で兩者を共通の信條に改宗せしめたりすることによつて、論争を越えて行くのではなく、具體的な問題についての實務的な勞作が、當面の仕事の性質によつて導かれる方向に沿つて續行されるといつた形でそれを越えて行くものである。」シュムペーターは、過去における經濟學者の意見を分裂せしめたものは、強調點の相違であり、それを生ぜしめたものは、科學以前の「イデオロギー的先入主」であるとす。従つて彼が、過去の理論を理解せんとする場合、その理論を創出した學者の性格をも研究對象とした。しかし問題は、それだけに終らなかつた。彼は「ヴィジョン」を科學以前の段階として、およそ知識の前進のためには不可缺のものであることを認識している一方において、科學的研究は先入主を排除し、客觀的な眞理を啓示しうるものであつてほしいとも考えた。シュムペーターの「藝術の爲の藝術」、「眞理の爲の眞理」の言葉の眞髓をここにみる事が出来る。彼のあくことを知らぬ知的好奇心を知ることが出来る。しかし果して、それが人にとつて可能なことであるか。彼は、バベルの塔を建設せんとした。シュムペーターの眞の先祖は、聖トマス・アキナスであり、プラトーンであるといつた人がいるのも當然である。所詮イデオロギーを排除することの不可能なことは、彼自身について考えれば説明することである。それにも拘らず科學者は、先入主を排除する爲に努力しなければならぬとし、彼の遺著「經濟分析の歴史」において